

教師の役割研究の課題と展望

—実践主体としての教師にとっての役割を捉える視点—

教職開発コース 小田 郁予

Challenges and Prospects for Research on Teacher Roles
—A Perspective on the Role for Teachers as Subjects of Practice

Ikuyo ODA

In order to examine the factors behind teachers' continuity of practice, a review of previous research on teacher roles was conducted. Prior to the review, this research discussed why it is necessary to examine and define the role of the teacher and summarized how teacher roles have been studied in previous research. Much of the prior research has focused on teaching roles as indicators of norms to be followed and guides to the teaching practice. For example, many of the past studies have provided teachers with directions for their practice by specifying the responsibilities that teachers should fulfill in the classroom and the school environment. How defined roles can function to support the teaching practice has also been discussed, such as avoiding difficulties by limiting roles and legitimizing practice by assigning roles. The role of the teacher has been characterized by the normative meaning of the role associated with each position, which supports the teaching practice. However, teachers are not passive entities that can simply be assigned roles. Unlike previous research, this study showed that it is necessary to examine the roles that teachers create for themselves as subjects of practice. By examining these roles, this research displayed the need for discourse and conversation analysis to examine teachers' interactions at a micro level, as well as the need for ethnographic descriptions of field practice to depict the dynamics of teachers' group interactions at a mezzo level.

目次

- 1 研究の背景ならびに本研究の射程
 - A 背景と目的並びに本研究の射程
 - B 本研究の構成並びに射程
- 2 なぜ役割か—これまでの職務継続をめぐる研究動向ならびに変動する学校
 - A 役割の検討を必要とする研究上の理由—実践継続検討における研究上の課題
 - B 役割の検討を必要とする実践上の理由—教師に向けられる期待の変化
- 3 役割とは何か—基本特性ならびに本研究における定義
 - A 役割の定義
 - B 役割の特性
- 4 教師役割はどのように捉えられてきたか
 - A 社会的地位に付随する期待や規範としての教師の役割
 - B 社会的言説により変わる期待や規範としての教師の役割
 - C 制度的規範の中で適応的に生きる専門家として

の教師にとっての役割

- 5 実践継続の背景要因を検討する上で必要となる研究視点と課題を明らかにする方法
 - A 専門家としての教師の実践継続を検討するために必要となる研究視点
 - B 役割のローカルな意味や役割遂行過程を検討する上で必要となる研究方法

おわりに

引用文献

1 研究の背景ならびに本研究の射程

近年教職を巡っては、深刻化する教師の多忙化や課題の複雑さ、教員の離職・休職率の上昇傾向や教員採用試験の低倍率化など、様々な課題が指摘されている。本研究の関心は、多様な課題が指摘される中で教師らがいかに諸課題に対処し、教育実践を継続しているのか、教師らの職務継続の背後にある実践や連携の取組みである。本研究の目的はそうした教師の日常実践や実践継続のメカニズムを明らかにするために必要

となる研究視点を導き出すことにある。以下になぜ教師らの職務継続の検討が重要な研究課題であるのか、筆者の研究関心の所在を示し(1A)、続く1Bにて、本研究の構成を述べる。

A 背景と目的並びに本研究の射程

本研究にて教師の日常実践、とりわけ多様な要請や困難の中において実践を継続する教師の職務継続に焦点化するのには、その職務の在り方や職場環境についての課題が教育の質に直結する重要な課題であるからである。教師の職務環境についてはOECDの実施するTALISのみならずUNESCOやEC、各国の調査機関が継続的に議論を続けているが、近年教員不足は各国で深刻な課題となっている。国内でも教職離れや教員不足は深刻な課題で、このことは海外でもTeacher ShortageやRetention Strategyなどとして教員不足に対抗する雇用と定着のための戦略が議論されている。この教師の職務継続を巡ってはこれまで主に、教師の職務負担軽減に向けた業務の整理や教員支援、とりわけ新任教員支援の具体方策、さらには教師がライフスタイルやキャリア過程でやりがいを持ちキャリア形成を維持、継続できるための支援などが各国で検討されており(例えばイギリス¹⁾、オーストラリア²⁾)、教師の専門性や職場環境整備に関する政策立案に向け議論が展開されてきた。我が国においても教師の職務負担を軽減しようと、2015年には「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について³⁾」、2019年には「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について⁴⁾」(以下「働き方改革」)が示され、多様化、複雑化する子どもたちの課題にチームとして連携する可能性や課題⁵⁾、具体的な教職業務の精選により、学校現場での働き方改革がいかに達成されるのか⁶⁾が議論されるようになった。

職務継続を支える政策や環境醸成は重要な課題であるものの、たとえば「やるべきこと」と「やらなくてよいこと」として示された業務と、実際の現場で教師らに「期待されていること」や、現場でその時その状況下で「やらねばならないこと」が合致しているかどうかは別である。これは教師の専門性を巡る議論についても同様で、リスト化された業務や専門性の一覧が教師の行う実践の全てや身に付けるべき資質能力の全てではなく、そうしたモデルを一つの指針としてそれらを介しいかに対話し、柔軟に教師の職務継続や成長発達を支援していくか、その際の環境醸成に向け、現

場理解も合わせて進めていくことが重要となる。そこで本研究は、教育実践の継続はいかに達成されているか、またその教師の職務継続はいかに達成されているかを探究するために、その場その時に求められる教師の役割に着目する。とりわけ本研究では教師らが時代の要請やその時々々の文脈に応じ実践を継続していることを教師らの役割遂行と捉え、教師らが日常の教育現場においていかなる役割を有しているのか、役割とはいかなる意味を持つのかに着目し、教師の実践継続について検討していくために必要となる研究視点の析出を目指す。

本研究において教師の役割に着目するのは教師の実践継続において教師一人一人が自己の役割を遂行し教師としての責任を果せている、という肯定的な教職アイデンティティの維持が不可欠であることと、教職を巡る専門性も、教師らに寄せられる役割期待を軸に構成されるものであり⁷⁾、教師らの実践継続と不可分な関係にあるためである。職務継続をめぐる展開、蓄積されてきた研究は、労働環境の量的改善を中心とする議論に傾斜しており、多様な相互作用の中で織りなされる教師の実践を支える働き方という質的な要素の改善に向けた検討が十分でない。

B 本研究の構成並びに射程

教師の役割に関する先行研究のレビューに先立ち、本節では本研究の構成並びに射程を示す。多様な教育課題や子どもたちと向き合う教師らの教育実践の継続について、教員文化が機能することにより破綻を回避し、教育実践の営みが継続しているとする「破綻回避装置としての教員文化」の機能が図式化されている⁸⁾(図1)。学校が抱える多様な原理的困難に対し教師らが蓄積、維持してきた捉え方や対処様式が教員文化として機能することが困難や課題に屈折作用をもたらし、学校の営みを持続させるとするメカニズムを示したものである。これは、学校の問題原因の把握のための概念として用いられていた教員文化を当事者による困難対処の方略として教員世界の内側から捉え直したものである。時代の移り変わりと共に教員文化が前提とする破綻回避を可能にする諸条件(c)、たとえば教員の社会的地位の承認など、が揺らいでいる現状を踏まえ、この教員文化の内実さらに踏み込み「破綻回避の諸条件」を再構築する研究の必要性が生じている。本研究は、教師が実践継続を実現させている相互作用の特徴やその過程に焦点化することでこの諸条件を明らかにするために必要な研究視点の導出をすることを

目的とし、以下の構成で研究課題を論じる。

第2章では、具体的になぜ教師の役割に着目する必要があるか、上述で触れた職務継続の検討をめぐる研究動向の流れを踏まえ、役割研究の検討を行う研究上の必要性(2A)並びに教育政策の流れや学校を取り巻く社会や子どもたちの変化から生じる実践上の必要性(2B)を論じる。第3章では、本研究が着目する役割とは何か、「役割」の定義を述べ(3A)、その上で役割がもつ基本特性(3B)を示す。続く第4章にて、教師役割が現場ではどういったものとして捉えられてきたかに注目し、授業研究や教師研究などにおいて教師役割が検討されている研究の動向を整理する。まず、実践において達成すべき目標や行動指針となるものとしての教師役割を示し(4A)、次に文脈に応じて作り替えられていくものとしての役割を示す(4B)。そして本章の最後に、制御可能なものとしての役割の捉え方や、実践を促進する機能を持つものとしての役割の側面について他領域の研究にも触れ、役割の別の側面を検討する(4C)。本研究では主に国内における役割研究に焦点化する。これは役割がその役割が期待される文脈やその時々⁹⁾の社会的ディスコースに大きく影響を受ける為で、本研究の関心が日本の教師らの実践継続の背景にある要因を明らかにすることにある。他方で、教職における役割の持つ可能性を検討する際には海外の研究知見や他領域でなされている研究も参照する。最後に第5章にてこうした先行研究の整理から、教師の職務継続、実践継続を検討する視点としての役割にて不足している議論を指摘し、今後

必要となる研究視点(5A)並びに研究方法(5B)を示し、展望を述べる。

2 なぜ役割か—これまでの職務継続をめぐる研究動向ならびに変動する学校

教師らの実践継続を検討する上でなぜ「役割」の検討が必要であるか、本章ではこれについて研究上の課題と、実践上の課題をそれぞれ述べる。

A 役割の検討を必要とする研究上の理由—実践継続検討における研究上の課題

本研究の前提にある研究関心は、教師らの実践継続、職務継続がいかに達成されているか、教師の実践継続を支えている日常の取組みの詳細である。

教師の職務継続については、教師のやりがいを支えるものとしての心的報酬性や献身的教師像などが教職の特徴として指摘されてきた。しかしその一方で離職や休職などに対する課題意識から教師のストレスや職場適応、バーンアウトなどの観点からも検討が進められてきており、その多くは一度に大量のデータサンプルを対象とする量的検討によりなされてきた。こうした研究の課題は、抽出された要因が個人内要因であるか、個人間要因であるかなどが分からないことなどにあり研究上の限界があることが指摘されていた⁹⁾。こうした課題を受け藤田らが学校現場のエスノグラフィにより教師らの日常の困難を描出した他¹⁰⁾、落合(2003)は教師のバーンアウトのメカニズムをエス

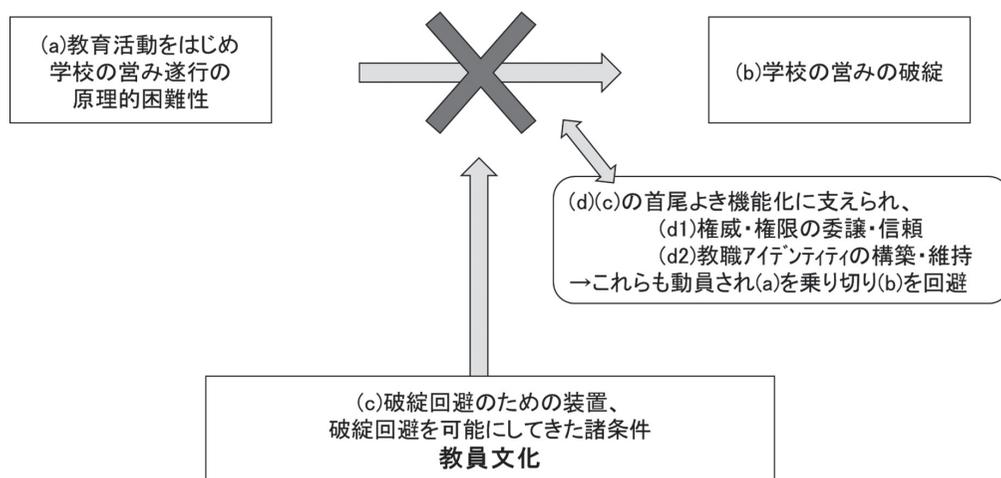


図1 教員文化をめぐる諸事象の関連構図

(久富, 2018 を元に筆者作成)

ノグラフィーの記述により検討し、教師らのバーンアウトの要因として、教師らの疲弊の背景に、教師らが置かれている職務構造と教師文化の存在があることを示している。無境界な教職の特性による職務の多忙さと、『人を教え導く』立場として援助要請がしづらい教師文化の影響が教師を疲弊に追い込んでいることなどを質的に明らかにし、教師の個人要因よりも社会的、歴史的な流れの中でバーンアウトが生じるものであると結論づけている¹¹⁾。こうした検討から明らかになった学校課題、たとえば職務の多忙さや無限定さ、援助要請のしづらさを元に、教師支援の取組みとして相互のサポート体制の確立や地域、家庭も含む役割分担等が推奨されているが、こうした議論では十分とはいえない。というのも、そもそも教師らは『人を教え導く』立場、として援助要請のしづらさを抱き、献身的教師たらんと期待に応える中で多様な業務を抱え込んでいる¹²⁾からである。こうした状況下で必要であるのは文脈に根差した諸困難の解明と組織の対応を検討する研究だけではなく、それらの間を繋ぐ研究視点であるといえる。

教師の職務継続を検討する上で教師のバーンアウトは深刻な課題であり、教師がどのような構造的困難に置かれ、その対処の過程でいかなる別の困難や葛藤が生じて、困難を解消しようのかを検討することは重要な課題である。本研究が着目する「役割」はまさにこうした社会的構造の中で人がいかなる期待や責任を負い、日常を営むかを検討するものであり、「役割」に着目することによって役割意識の観点から教師がどのような期待を他者から受け、その中で葛藤し、実践を継続しているかを明らかにすることができると思う。

B 役割の検討を必要とする実践上の理由—教師に向けられる期待の変化

役割に着目すべき第2の理由には学校現場の実践上の課題として子どもたちが抱える課題が複雑、多様化し、それを支える多様なアクターの出現により教師が果たすべき役割が変わってきているということがある。近年「働き方改革」や「チームとしての学校」などとして教師の負担軽減に向けた改革が進められる中、学校教育に関わるアクターは多様化し、これらの中には日常的に子どもたちと関わる養護教諭や司書教諭、特別支援教育支援員などのアクターもいれば、その都度の要請に応じて教師らと連携をとるスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーのような

アクターもおり、多様なアクターらとの協働の中で生まれる新たな教師役割の検討が必要となっている。

さらに、子どもたちの抱える課題の多様化や複雑化に伴い、地域や保護者、子ども達からの期待が変化していることも役割検討を要する背景の一つとしてある。例えば、90年代後半の教師らには、いじめや不登校問題を受け、学校における「心の教育」の必要性が指摘されるようになり教師には「カウンセラー役割」が新たに付与された。その後も特別支援ニーズを有する児童生徒数の増加や外国籍児童の増加、家庭の社会経済文化的背景 (Economic, Social and Cultural Status: ESCS) の格差など、その都度社会で指摘される課題と向き合う現代の教師らには「全人的な発達・成長を保証する役割」や「人と安全安心に繋がることができる居場所・セーフティネットとして身体的、精神的な健康を保証するという福祉的な役割」なども新たに付与されている¹³⁾。教師は常にその時々の子どもの家庭の変化や社会の変化と共に新たな役割を担っていくことが求められている。教師役割の変化やその都度の教師らの対処の在り方は教師の実践継続の検討の根幹に位置づくことから、本研究においてこれまで教師がいかなる社会的背景の下で、いかなる課題や困難を抱えながらどのような役割を担ってきたのかを整理していく。

3 役割とは何か—基本特性ならびに本研究における定義

では、本研究が着目する教師の役割とは何か、本章では、教師役割を巡る先行研究の検討に先立ち、この役割とは何かについてその特徴を整理する。本研究の関心は、制度的な職員としての教師が果たすべき役割ではなく、現場の最前線で子どもたちや保護者と向き合い、現場文脈を共有する同僚らと協働しながら状況適応的に多様な相互作用の中で実践継続をする教師らが担う「役割」にある。以下、主体的で自律的な存在としての教師がいかに実践継続を果しているかを検討するため、不足している研究視点の析出に向け先行研究を概観する。

A 役割の定義

役割を巡っては何を前提とするかによってその定義が2つに分かれる。第1は構造機能主義的に役割を捉えるもので、地位と役割を対概念として捉え、社会の中で各人が必ず有する多数の地位に結び付く役割があるとするものである¹⁴⁾。ここでの「地位」とは個人が

他の諸個人に対して社会システム内のどこに位置するかを示すもので、「役割」は、行為者が他の行為者との関係においてどう振舞っているかを示す¹⁵⁾。リントンやパーソンズ、マートンらはこの「地位-役割」を社会システムの構成単位とし、「役割」は社会が個人に対して課題として要求するもので、外在的な拘束力を持つ「構造的要求」の側面を持つものと定義した¹⁶⁾。第2は、ミードによるシンボリック相互作用論における役割概念の捉え方で、ここでは事物の意味は個人が参加する社会的相互作用から派生ないし発生すると捉えられ、意味は個人の解釈過程において処理、修正されるものであるとされる¹⁷⁾。これらの大きな違いは、前者が社会的な地位に付随する規範を役割とし、外的拘束力を持ち、行為を規定するものとしているのに対し、後者は、地位としてではなく、「立場」(standpoint)という観点から、行為者が立場を相互作用過程で自ら採用したり、相互作用の結果として得たりする役割取得 (role-taking¹⁸⁾) や、他者から寄せられる期待を受けふさわしいとみなされる行動パターンを形成していく役割形成 (role-making¹⁹⁾) の観点から役割を捉えている点にある。

本研究は、前述のとおり、制度的な教師として果たすべき役割ではなく、最前線で生きる教師らが相互作用過程の中で取得する役割、すなわち後者の役割に関心がある。しかしながら教師は多様な期待を受ける大きな社会の一員、学校組織の一員としてもあり、教師という地位に付随する規範や他者から寄せられる期待との関係において、個人(教師)がどう振舞うかとする役割の検討も無視できない。Levinson (1959) は、役割の3つの側面として「構造的要求(structural demands)」、 「役割観念(role-conceptions)」、 「個人の役割パフォーマンス(individual role-performance)」の区別とそれらの相互補完的な関係を指摘した²⁰⁾。本研究もこれら3側面を有するものとして役割を捉え、教師らが社会の中でいかなる期待や規範を付与され構造的要求を受けるシステムレベルの役割と、他者との相互作用の中で役割を解釈、取得するミクロな個人レベルの役割観念や役割パフォーマンスの観点から役割の特性やこれまでの研究動向を整理し、教師の実践継続を検討する上で必要となる研究視点を析出する。

B 役割の特性

役割の第1の特徴は、人が個々人の持つ社会的地位に応じて常に複数役割を有し、その役割に応じて集団の成員の実践が規定される、ということにある。その

地位とは「特定の諸個人が占める社会定型内の地位」を指す²¹⁾。人はこの「地位」を不可避的に複数(地位群)を有しており、そのそれぞれに結び付く一連の役割(役割群)を持っているとするもので、これはLevinsonの指摘した3側面の内、「構造的要求」にあたる。例えば、教師という社会的地位に対しては、教師として他の同僚教師との間や、子ども達、保護者、教育委員会主事ら、などとの関係において生じる複数の役割、すなわち役割群がある。例えば同僚との関係においては同僚役割を有し、校務分掌を担ったり、情報共有を図ったりすることが期待され、子どもたちや保護者らとの関係性において教科指導や学級経営、子どもたちの相談相手などが期待される教師役割を担う²²⁾。こうした役割群は教師としての地位に付随する役割であるため、この教師がたとえば母や妻、地域の民生委員のような社会的地位にある場合は、そのそれぞれの地位に対してもそれぞれ役割群を持ち、それに伴う役割期待に添えていくことが期待される。この役割の第1の特性は、制度や組織から賦与されるものとしてあり、教師の実践を規定、時には拘束する側面(「構造的要求」の側面)を持つ。

役割の第2の特徴は、役割が文脈やその時々社会的ディスコースの影響を受ける点にあり、期待される役割に応じた適応的な実践を成員に促すということにある。これは成員が集団内の文脈や社会全体のディスコースに影響され感得する役割で、Levinsonの示した3要素の役割観念に該当する。例えば、同じ教師であってもその対象が誰かによって果たすべき役割や寄せられる期待は大きく異なる²³⁾。同じ年代の子ども対象であっても役割を遂行しようとする相手である「役割相手」によってその期待や負う役割、責任は変わる²⁴⁾。例えば、児童の多くが受験を視野に入れ学習に力を入れている国や地域の場合、教師の学習指導役割の遂行が中心的課題となり、その役割遂行が重要な関心事となるのに対し、子どもたちの大半が家業を継ぎ生計を立てることを一義的な目的としている国や地域においては学習指導の期待に応える教師役割の遂行は末梢な問題として関心がもたれない可能性もある。役割相手が誰であるか、どのような文脈におかれているかによって役割遂行として求められる行動は変わる。

後者の社会的ディスコースの影響についても同様で、その時々時代や社会からの要請や期待の影響を受け教師役割は変化する。教職が「聖職」とされ、社会から無条件の信頼と威厳を得ていた戦前は、地域との連携も担い、学内外との繋がりの中で教師は多様な

役割を担っていた。しかし戦後徐々に学校はその責任を学校内部に限定するようになり²⁵⁾、ILO・UNESCOの勧告²⁶⁾後、教職が専門職としてその役割を担うようになったり、「チーム学校」「働き方改革」などの言説の中で多様なアクターたちと連携をすることが求められるようになったりする中で教師に期待される役割も変化してきている。これについては医師の役割の変遷を見ると分かりやすい。医師が患者の病を解決するという医療モデルの時代に最優先とされた医師の決断は、患者個人のQOLを最優先とし患者や家族の意志が尊重される時代になると、説明や可能性の提示によるインフォームドコンセントやそれに基づく患者や家族の意志決定の下、最大限のケアを検討する役割へと変化した。このように役割は、役割を遂行する相手が置かれている文脈や、役割が遂行される所や時代などの社会的言説の影響を受ける特性を持つ。

ここまで、「役割」の特性について、個々の社会的地位に付与される役割が規範となり、行動を規定する側面を持つ特性と、特定の地位に付随する役割がその時々々の役割遂行の相手や置かれている文脈、時代的背景の影響を受け、変化するものである特性があることを論じた。次章ではこれらの2つの特性、社会的地位に付随する期待や規範の側面と、文脈や社会的言説により変わる期待や規範の側面から教師の役割がどのように捉えられてきたのか、先行研究を概観する。

4 教師役割はどのように捉えられてきたか

本章では、まず社会的地位に付随する期待や規範の側面という観点から、特に「教師」として社会から寄せられる学習指導や児童生徒指導役割を担う存在としての教師らがいかなる役割を担い、そうした役割がいかなる意味を有しているかを検討する(4A)。次に文脈や社会的言説により変わる期待や規範の中で適応的に振舞う実践家としての教師の実践や、そこでの教師の役割がどのように論じられてきたかを整理する(4B)。その後、制度内で生きる職員としての教師役割と、日常的教育実践のただなかで置かれた文脈に適応的に生きる専門家としての教師の役割について小括し、制度的役割が求める構造的要求に応えつつ、文脈適応的に役割を取得し自らの役割を修正、創造する役割を巡る議論について触れる(4C)。

これらの議論に先立ち、先行研究を捉える手順について述べる。国内の学校現場における教師の役割がどのように捉えられているのか傾向を検討した4A、4

Bについては、CiNii Researchにて「教師の役割」「教師役割」をキーワードとして検索し、本文にアクセス可能であった533編より学会発表要旨集録や書評、重複論文、雑誌のコラム、本研究の趣旨に合致しないものなどを除く343編の研究論文を対象にその傾向を分析した。分析にあたり表題を縦軸、出版年、対象、研究設問(研究目的)、「役割」との関係についてのコメントを横軸とするマトリックスを作成し、教師の役割を巡る先行研究の特徴を検討した。4Cについては、4A、Bにおける議論には見られない視点を見出す目的から、他領域において役割を検討している文献に当たった。本研究においては教職と同様の対人専門職であり、多様なアクターたちが関わりながら実践を継続する医療福祉領域の文献を参照した。以下、教師の役割に関する議論がいかなる問いの下で検討されており、またその役割が現場教師らにとってどのようなものとして捉えられているか現行の議論の特徴を整理し、その上で、課題を指摘する。

A 社会的地位に付随する期待や規範としての教師の役割

教師の役割を検討した研究の第1の特徴として、その時代ごとに子どもたちが身に付けるべきと期待されている力や能力の育成、学習環境の醸成に向け、教師がその期待に応えるためにすべきことや効果があると思われることについて役割がリスト化されるという特徴を見出した。これらの多くは授業場面における教師の役割を検討しており、特定の文脈における教師の実践の在り方や果たすべき責任を実証的に検討することにより、現場での具体実践の在り方を示し、体系化することで教師の実践に方向性を与えてきた。「子どもの〇〇の育成支援における教師の役割は何か」といった研究設問の下、子どもの探究的な会話を引きだす教師役割²⁷⁾、数学的な見方や考え方を育成する教師役割²⁸⁾のように、その時々子どもたちが身に付けるべきとされる資質や能力を育成するために教師が果たする役割とは何かを提示して来た。具体的に教師が担っていくべきことのリストの射程は広く、学力低下が指摘される文脈では特別活動を通じた指導を行う上での教師役割²⁹⁾、ICT活用推進の文脈では学習の個別最適化としてオンライン授業やハイブリッド授業において教師が果たす役割³⁰⁾、アクティブラーニング推奨の文脈では参画型協働学習の進捗に合わせ、コンサルタント、ファシリテーター、コーチと段階的に変わる教師役割³¹⁾、のようにその都度の社会が要請する力の

育成に向けて教師が果たすべき役割が明示されてきた。

これらは、「探究的学び」や「深い読み」「アクティブラーニング」のような明確なゴールや達成方法が見えづらい目標に対し「〇〇を育成する上で教師が果たすべき役割は何か」との問いの下、教師らにその実践の方向性を示してきた。こうした議論における役割は、目標達成を果す手段や具体的な指針を示すものとして検討されたもので、日常的に子どもたちとの学びの最前線で子どもたちと空間や時間を共有する中で発揮される教師らの即興的な判断や専門的判断の背後にある教師の自律性や主体性が置き去りになっている。さらには、こうした指針が、「果たすべき責任」として示され、教師らの行動を規定することで多様な子どもたちとの相互作用の中で織りなされる教師らの実践が矮小化される可能性もある。

B 社会的言説により変わる期待や規範としての教師の役割

上述の教師役割は社会の言説を受けその都度の社会が学校や教師に期待することを受け子どもたちに身に付けさせたい力や子どもたちが身に付けているべき力を育むために教師が担うべき役割は何かを検討したものであった。先行研究の第2の特徴は、日常的に子どもたちや同僚、地域の人々など、多様な他者との相互作用の中で教育実践を営んでいる教師らがそれぞれの文脈やその場において求められる支援や指導の在り方と向き合うもので、教師らは置かれている環境の中で自らの役割を柔軟に変えながらその都度その状況において果たすべき役割と向き合う特徴を見出した。

例えば、上述の教師らの関心は主にその時々子どもたちが身に付けるべきとされる力を育成するために教師が果たすべき役割を検討したものであった。しかし社会経済的格差の厳しい学区の教師らにとっては荒れの統制や学習意欲の喚起やケアが重要な教師の役割で、そこには保護者との関係構築も重要な教師役割として認識され役割が遂行されていた³²⁾。そしてこうしたサポート役割の認識は、社会経済的格差高位群と低位群で働く教師では異なっており、前者の方がその認識度合いは高くなるなど教師らがその状況に応じて自らの役割を認知し行動していることも明らかになっている³³⁾。さらに、こうした認識や役割遂行がその文脈の中で取得され、創造されていくことの証左として初任前期から初任後期にかけて役割認識度合いの得点が向上することなども明らかになっている。実際にこう

した社会経済的背景(Socio-Economic Status, 以下SES) 格差も含む、児童生徒の多様な課題まるごとを支える状況下では、配置されるスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門職をうまく活用する「ゲートキーパー(gatekeeper)」役割のような新たな役割も柔軟に担うようになる。多様な課題を抱える子どもたちの支援の為、多職種との連携が求められる現場の教師たちは、子どもたちの日常を知る常勤の専門職として、何が取り扱うべき課題であるか選定、業務の分解をし(degradation), 誰がその案件を担うべきか振り分け、職務委譲を行うゲートキーパー役割を担う³⁴⁾。排除の危機にある子どもたちと共にある教師らは、子どもサポート役割のみならず、子どもたちや市民と共に行動を起こす主体として社会変革の契機を作る役割も時には担い、共に学校を作ることで社会を変えていく契機を創出する変革の担い手としての役割も担っている³⁵⁾ ことが明らかになっている。

こうした研究では教師らの置かれている文脈の中で果たすべき機能や他者から寄せられる期待を受けてすべきことが検討されており、新たな教師役割が立ち上がったたり、教師の役割意識の変容が起きたりすることが日常の多様な相互作用の中で捉えられた役割とその役割遂行として描かれている。しかしながらそれでもなお、前提となっているのは、その置かれている社会や組織における地位や、文脈における立場において果たすべき役割と社会的、外的に賦与される役割である。ここでは教師はそうした役割によってその実践を規定され、そこに駆動される受動的な存在としてある。第1節、第2節では制度内で生きる職員としての教師役割と、置かれた文脈に適応的に生きる実践家としての教師の役割について述べ、国内の授業研究や教師研究において教師の役割に触れる実践研究の多くは行動を規定するものとしての役割に傾斜していることを示した。次節4Cでは、他領域の検討も含め、主体的に自らの立場に対して寄せられる期待や規範を活用し、実践創出をする、役割が行為者の実践を支え、促す側面を先行研究から見出す。

C 制度的規範の中で適応的に生きる専門家としての教師にとっての役割

教師の役割を巡っては教師の職能の分化が困難で³⁶⁾、とりわけ子ども丸ごとを捉える全人教育に重きを置いてきた日本の教師らは無限定な役割を負っていることが実践の困難の要因となることが指摘されてきた。しかしながら、海外ではこうした役割を制御する

対象と捉え、役割をコントロールし管理することによって(managing the teachers' roles)、自らの効果的な実践ややりがいを維持する教師らの取組みが検討されてきた³⁷⁾。指導役割と親密な友人役割双方を担う小学校段階の教師の実践としてユーモアを戦略的に使用することによってこの2つの役割間の葛藤の緩和を試みる教師の実践や³⁸⁾、理想と現実の狭間にありながらも様々な役割の中からその都度自己のアイデンティティを選択し、様々な出来事とのかかわり方を選んで日常の多様な相互作用に対処する教師の対処の在り方³⁹⁾が対処方略(strategies)として研究されてきた。これらの研究は日常の多様な相互作用の中で、社会的に期待される役割と自己の認識する役割の折り合いをつける教師らの実践に焦点を当てたもので、ここでは役割は応えるべき要求や規範としてというよりも、ある側面は一定程度受け入れ、別の側面は時には拒む、のように対処していくものと捉えられている。ここで重要であるのは、教師自身が多様な役割や対処すべき事柄の内、どこにどれだけコミットするかをその都度教師自らが選択し、他者との相互作用の中で柔軟に状況に応じて調整しながら役割を果たしている⁴⁰⁾ということである。役割が常に行為を規定するものとしてあるわけではなく、人は役割を文脈に応じて使い分け、ある文脈によってはその文脈における期待に相反する役割を演じないようにする、文脈を分離する役割葛藤対処をする、などし、対処可能なものとしての役割も明らかになっている⁴¹⁾。

また、行為者の行動を規定し制御するものとしての役割ではなく、行為者の実践を後押しする側面も役割にはある。役割境界が明確な医療福祉領域においては職務の管轄権(jurisdiction)として役割を巡る議論が進んでいるが⁴²⁾、ここでは役割を明示することによって実践に正当性を付与したり、職務負担を軽減したりする、職務遂行を助けてくれるものとしての役割の側面があることが指摘されている。役割のこの側面を明示的に示す研究として医療福祉領域の研究を1点示す。山上(2013)は、患者の身体や臓器、年齢別に患者を診るのではなく一人の患者の全体を診る総合診療医の葛藤の語りに着目し、葛藤の特徴やその対処様式を経年インタビューにより検討している。役割境界が不明瞭で、責任範囲の曖昧さや事態が予測困難で答えがない中で判断が迫られる総合診療医は、専門分化されていない医療の不確実性が大きな不安材料である一方、自身に医師役割を付与することによって自身の実践に正当性を付与し実践継続に繋げるとする語りを紹

介している⁴³⁾。昨今患者のQOLへの配慮や家族の意志尊重が求められる医療現場で、患者負担となる検査は控えたいと考えながらも、症状の悪化を防いだり症状を予期したりする医師役割を担っていることを認識することで、葛藤の中にあっても積極的に検査を行うように態度を変更していった医師の語り示されている。この事例にあるように医師らは時に役割限定をすることや、役割創出をすることによって困難を回避、低減する適応行動をとりながら日々の医療活動を継続する。これは限定性戦略とされ⁴⁴⁾、責任範囲が広いことに対する心理的負担に対し、役割を限定することによってそうした苦悩を回避しようとするものである。学校においても同様で、この側面は主に教師のストレス研究の観点から検討されてきた。学校教育において複数のアクターと多様な職務を担う中で他者と役割が重複したり、自分が担うべき役割が曖昧であったりすることが逆に教師の職務負担を増大させ、ストレスの要因となることが指摘されている⁴⁵⁾。その為、職場内での役割葛藤を減らすこと、すなわち役割を限定し職務境界を明確にすることが教師の職場改善、ひいてはストレス軽減⁴⁶⁾や実際のよりよい業務の遂行⁴⁷⁾に資することが示されている。教師を巡る様々なアポリアに対処する上で教師らは日常的に児童生徒や保護者、同僚らに対して実践の正否、適否が見えない中でも、その正当性を呈示していかななくてはならない。役割は特定の地位や役目を負う人に特定の責任を付与することによって実践に正当性を付与し、教師の職務を支える要因となる⁴⁸⁾。

以上「役割」をめぐる先行研究の流れを整理した。まず、4Aではこれまでの役割に関する研究の傾向として、行動指針を示すものとしての教師役割の研究知見を示し、社会システム内で「すべき行動」が示される研究が創造性ある教師らの実践を矮小化する可能性を指摘した。続く4Bでは、社会的地位に付随する役割としてではなく、日常の相互作用の中で役割を認識し、期待に応えようとする教師らの取組みを概観し、外的に駆動される受動的な存在としてはなく、主体的に自らの立場に対して寄せられる期待や規範をむしろ活用し、実践創出をする教師らの実践に照射する必要を指摘した。最後に4Cにて制御可能なものとしての役割の捉え方や、実践を促進する機能を持つものとしての役割の側面について触れ、専門家としての教師が自律的、主体的に実践を継続していくことを検討する上で今後必要となる研究視点について述べた。

5 実践継続の背景要因を検討する上で必要となる研究視点と課題を明らかにする方法

本研究の目的は、多様な困難の中にありながらも日常の教育実践を継続し続ける教師らの営みの背景にある要因を析出するために必要な研究視点を析出することであった。この研究視点の析出にあたり教師の実践遂行に深くかかわる教師役割に焦点を当て先行研究の検討を行ってきた。その結果、教師の役割は制度的に個人の実践を規定するものとして捉えられ、責任遂行の過程での到達地点を示す機能と、文脈の中で個人に認知され、寄せられる期待によって実践遂行を促進する機能に焦点が向けられてきたことを確認した。こうした日本の文脈における「教師の役割」に関するこれまでの研究は、その焦点が特定文脈の特定役割において「教師が何をすべきか」や「教師の果たすべき機能とは何か」に向けられており、教師がその都度の多様な相互作用の中で持ちうる複数の役割群の役割遂行や、そうした複数役割間の葛藤や調整等、日常的流動性、力動性についての検討は十分なされていない。昨今、教師職以外の多様なアクターらとの連携が求められる学校ではその役割境界は一層不明瞭になっており、日常的に役割重複も生じている。第2章で論じたように、社会的地位に応じて複数役割を持ち、その役割に応じた期待を受ける事、また、その役割を遂行する相手や文脈、その時々社会的ディスコースによっても期待は流動的に変化することを踏まえれば、その都度のアクター間の相互作用や、組織成員の関係性の理解等、文脈に根差した検討は必須である。

本研究は筆者の研究関心にある教師の実践継続を背景で支える教師の実践や連携の取組みの特徴や力動を明らかにするために必要となる研究視点を明らかにするため、職務継続において重要となると考えられる教師役割について先行研究のレビューを行ってきた。以上を受け、ローカルにその都度の役割が立ち上がるプロセスや要件、さらには役割遂行の過程を明らかにする研究視点3点と(5A)、今後検討すべき研究方法2点(5B)について論じる。

A 専門家としての教師の実践継続を検討するために必要となる研究視点

ここまでの先行研究の検討を踏まえ、今後必要となる研究視点は以下の3点である。

第1に、教師役割が日常の実践の中でどのように教師らに認識されているかを捉える視点が必要である。

これまで教師の役割や teacher role は制度的、組織的に期待されたもので、教師が果たすべき規範にその焦点が向けられていた。とりわけこれまで授業研究や教師教育の文脈における役割の関心は、外的に教師の実践を規定したり、その方向性を枠づけたりする側面に向けられていた。しかし教師が受ける期待や果たすべき責任、役割はその時々状況や地位に応じて複数あり、実践過程で受けるその都度の期待に応じ、教師らは多様な相互作用の中で自らの役割を認識し、実践を行っている。現場で生きる人々の日常の継続的な調査により、あるできごとが現場で生きる人々にいかなる意味を持ち、日常の実践にいかなる影響を及ぼすのか、多様な相互作用を分析対象として役割文脈の中で生じ、それが認識されるプロセスや、そのプロセスや認識のされ方を検討する視点が必要である。教師らとその時々どのように自らの役割を認識し、他者との相互作用を通して実践を行っているか、学校のその都度の文脈のみならず、その時々社会的背景も踏まえ、教師らが何をどのように経験し、自らの役割を位置付け、実践を行ってきたかを検討することで教師らが多様な困難や葛藤の中でも実践を継続させている背景要因に迫ることができると考えられる。

第2に、教師らに感得された役割がどのように遂行されていくか、役割遂行の過程を検討する視点が必要である。他者からの期待や実践現場における多様な相互作用の過程で教師らがいかなる困難に直面し、そうした困難にいかに対処していくかを検討していく視点が必要である。これまで教師の役割を巡っては、授業における教師役割や、児童生徒支援をめぐる多様な他者との連携場面において教師が果たすべき役割、等その対象ごとに役割が検討されてきた。教師たちはその対象ごとに実践継続において異なる方略をとるのか、異なる場面においても共通する方略をとるのかその特徴を明らかにする必要がある。それは、今後一層多様なアクターが学校教育に携わることが想定される中で、教師に固有の役割や責任、その遂行過程を整理することがよりよい連携・協働に必要となると考えられるためである。

第3に、こうした教師の役割遂行を助ける環境的要因を検討する視点も必要である。これまで、環境整備については「働き方改革」の一環で量的な議論が展開されてきていたが教師らが役割を遂行し、肯定的アイデンティティの下で実践を継続できることが職務継続において極めて重要になると考えられるためである。ここまでの検討してきたように、教師は自らの社会的

地位や立場、その都度の社会的ディスコース等、制度的規範の中で適応的に実践を行う専門家である。柔軟にその都度の役割期待を踏まえ、その場その時の役割相手に応じた実践を継続するのであれば、その実践が展開される環境とはいかなるものかを検討する視点も実践継続のメカニズムを理解する上で不可欠であるといえる。

B 役割のローカルな意味や役割遂行過程を検討する上で必要となる研究方法

以上を踏まえ、今後とるべき研究方法は以下の2点である。

第1に、ローカルに立ち上がる役割や生成される役割とそのプロセスを描くためには、エスノグラフィーの記述など、継続的な調査を通し、日常の中で繰り広げられる多様な相互作用の特徴を明らかにする。教師の日常実践の観察から異なる場面においても首尾一貫してみられる実践の特徴や課題対処の方法、実践を継続している要因の解明を目指す。また、継続的な観察により特定の実践や対処様式が選好されたり排除されたりすることを記述することによって特定の実践や行動型が教師集団に対して持つ意味や教師文化が持つ機能を検討する。

第2に、こうしたその都度の教師の経験や意味付けを検討する上で日常的教育実践を構成する主体としての教師らが相互作用の過程でどのように役割を認識し、時に顕在化する役割意識のズレや衝突などの中でズレや対立を調整するか、微細な相互作用の過程を描き出すことが必要となる。これに関しては実際のグループ協議やケース会議における教師らのやり取りから困難場面で教師が援助要請をする方法や事例を媒介として対話する方法を検討したり、そうした日常のやり取りを巡っていかなる思いを抱いたりしているか、インタビューの語りなどから微細に描き出していく。

おわりに

本研究は、多様な困難が指摘される学校現場において教師がいかに日常の実践を継続しているのかという研究関心の下、その課題解明に必要な研究視点を析出することを目的に役割に焦点を当て先行研究の整理を行った。教師はこれまで様々な教育改革や移り変わる時代の要請の中でその都度置かれている文脈に適応的に自己の役割を遂行し教育実践の継続を果してきた。しかし教師らはそうした改革の単純な受け手や、

外的にその実践を規定され、適応するだけの存在としてではなく、改革の担い手や主体的、自律的専門家として時には役割を制御、活用する存在でもある。今後、本研究で析出した視点により教師らの実践継続の背後で機能している相互作用の特徴や調整の過程を検討し、それにより時代や社会の要請が変わってもその都度自己の役割を柔軟に調整、創出させながら、誇りを持ち実践を継続していく教師らの取り組みを明らかにしていく。

引用文献

- 1) DfE (Department for Education) 2019 Teacher recruitment and retention strategy - <https://www.gov.uk/government/publications/teacher-recruitment-and-retention-strategy> (2022年9月27日最終閲覧)
- 2) Teacher Workforce Shortages - Issues paper.pdf (education.gov.au) <https://ministers.education.gov.au/sites/default/files/documents/Teacher%20Workforce%20Shortages%20-%20Issues%20paper.pdf> (2022年9月27日最終閲覧)
- 3) 文部科学省中央教育審議会 初等中等教育分科会 2015年「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」1. 「チームとしての学校」が求められる背景 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1365970.htm (2022年9月15日最終閲覧)
- 4) 文部科学省 2019年「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(答申)」 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/03/08/1412993_1_1.pdf (2022年9月27日最終閲覧)
- 5) 溝部ちづこ・梶田英之・酒井研作・財津伸子・斉藤正信・道法垂 2019. 「「チーム学校」に向けた今後の可能性と課題(3)中学校教育現場の質問紙調査から一考察」【比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究】第5巻, pp.178-193.
- 6) 安藤知子 2016. 「「チーム学校」による教育行政・学校の葛藤と教師役割の変容: 連携・協働の在り方」『日本教育行政学会年報』第42巻, pp.233-237.
- 7) 浜田博文・山下晃一・朝倉雅史・安藤知子・高谷哲也・加藤崇英・大野裕己・高野貴大・照屋翔大 2020. 『学校ガバナンス改革と危機に立つ「教職の専門性」』学文社, pp.146-161.
- 8) 久富善之・長谷川裕・福島裕敏編著 2018. 『教師の責任と教職倫理: 経年調査にみる教員文化の変容』勁草書房, pp.1-17.
- 9) 川上康彦 2021. 『教員の職場適応と職能形成: 教員縦断調査の分析とフィードバック』ジアース教育新社, pp.84-95.
- 10) 藤田英典・油布佐和子・酒井朗 1995. 「教師の仕事と教師文化に関するエスノグラフィ的研究—その研究枠組と若干の実証的考察」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第35号, pp.29-66.
- 11) 落合美貴子 2003. 「教師バーンアウトのメカニズム—ある公立中学校職員室のエスノグラフィー」『コミュニティ心理学研究』第6巻第2号, pp.72-89.
- 12) 久富善之 2017. 『日本の教師, その12章: 困難から希望への途

- を求めて』新日本出版社。
- 13) 文部科学省 2020. 資料5-1 誰一人取り残すことのない「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(中間まとめ素案)(mext.go.jp) https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_syoto02-000009845_7.pdf (2022年8月26日最終閲覧)
- 14) Merton, R. K., 著; 森東吾・森好夫・金沢実訳 1969. 『社会学論と機能分析』青木書店, p.7.
- 15) Parsons, T., 佐藤勉訳. (1974). 社会体系論. 東京: 青木書店.p.33.
- 16) Levinson, D., J., 1959: "Role, personality, and social structure in the organizational setting". *Journal of American Social Psychology, Vol. 8*(2), pp. 22-36.
- 17) 岩田若子, 1988 「役割」概念の再検討—E. Goffmanにおける「役割距離」の含意—, 『慶応大学社会学研究科紀要』, 第28号, pp.11-21.
- 18) Blumer, H., 後藤将之訳(1991). 『シンボリック相互作用論: パースペクティブと方法』東京: 勁草書房. p.16.
- 19) Turner, R. H., 1956: "Role-taking, role-standpoint, and reference-group behavior," *American Journal of Sociology, vol. 61*, pp.316-328.
- 20) Levinson, D., J., 前掲書 (1959) pp. 22-36.
- 21) Merton, R. K., 前掲書 (1969) p.334.
- 22) 安藤知子 2005. 『教師の葛藤対処様式に関する研究』多賀出版, p.49.
- 23) Wood, P. 1990. *Teacher Skills and Strategies*, The Falmer Press, pp.54-76.
- 24) Merton, R. K., 前掲書 (1969), p.337.
- 25) 油布佐和子, 前掲書 (1999), p.153.
- 26) ILO・UNESCO 1966. 「教員の地位に関する勧告」文部科学省 <https://www.mext.go.jp/unesco/009/1387153.htm> (2020年8月29日最終閲覧)
- 27) 一柳智紀. (2013). 児童の話し方に着目した物語文読解授業における読みの生成過程の検討: D.バーンズの「探求的会話」に基づく授業談話とワークシートの分析. *教育方法学研究*, 38(0), 13-23.
- 28) 森田大輔・二宮裕之 2019. 「数学的な見方・考え方の育成に関する一考察: 中学校数学科における多様な考えとその扱いに焦点を当てて」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第17巻, pp.115-122.
- 29) 高橋早苗・鈎治雄 2017. 「特別活動の変遷と教師の役割への一考察—新学習指導要領における教師の適切な指導について—」『教育学論集』第69巻, pp.163-185.
- 30) 小栗成子・Allen, D. P.・杉山優太 2020. 「ブレンドから遠隔への最適化—コミュニケーション力育成をめざした一年生英語授業デザインの一例—」『中部大学教育研究』第20巻, pp.53-67.
- 31) 武田正則 2013. 「参画型協働学習におけるファシリテーションモデルの開発」『教育情報研究』第28巻, 第4号, pp.15-26.
- 32) 中村瑛仁 2019. 「学校環境の違いによって教師役割はいかに異なるのか?: 校区の社会経済的背景に着目しながら」『教師学研究』第22巻, 第1号, pp.1-11.
- 33) 神村早織 2014. 「校区の社会経済的格差と教師の役割認識」『教育社会学研究』第94巻, pp.237-256.
- 34) 保田直美 2014. 「学校への新しい専門職の配置と教師役割」『教育学研究』第81巻, 第1号, pp.1-13.
- 35) 若槻健 2015. 「「排除」に対抗する学校」『教育社会学研究』第96巻 pp.131-152.
- 36) 岩田康之 2008. 「教育改革の動向と教師の『専門性』に関する諸問題」, 久富善之編著 2008. 『教師の専門性とアイデンティティ: 教育改革時代の国際比較調査と国際シンポジウムから』勁草書房, pp.31-48.
- 37) Wood, P. 前掲書(1990), p.57.
- 38) Pollard, A. 1985. *The Social World of the Primary School*, London, Holt Rinehart and Winston. p.24.
- 39) Wood, P., 前掲書(1990), pp.121-144.
- 40) Wood, P., 前掲書(1990), p.143.
- 41) Parsons, T. 著, 佐藤勉・日高六訳 1974. 『社会体系論/パーソンズ』青木書店, pp.280-283.
- 42) Abbott, A. D. 1988. *The system of professions: An essay on the division of expert labor*. Chicago: University of Chicago Press.
- 43) 山上実紀 2013. 「医師の役割意識と苦悩の創出: 現代日本の総合診療医の事例から(界面に立つ専門家—医療専門家のサファリングの人類学)」『文化人類学』, 第77巻, 第3号, pp.414-434.
- 44) Parsons, T. 著, 佐藤勉・日高六訳 1974. 『社会体系論/パーソンズ』青木書店.
- 45) 高木亮 2001. 「教師の職務ストレスから見た学校改善に関する研究」『日本教育経営学会紀要』, 第43巻, pp.66-78.
- 46) 高木亮・田中宏二・淵上克義 2006. 「教師の職業ストレスにおける職場環境の要因と職務自体の要因がバーンアウトに与える影響の検討—職場環境要因が及ぼす緩衝効果(交互作用の効果)を中心に—」『岡山大学教育学部研究集録』, 第131巻, 第1号, pp.155-165.
- 47) 長谷部慶章・阿部博子・中村真理 2012. 「小・中学校における特別支援教育コーディネーターの役割ストレスに関連する要因」『特殊教育学研究』第49巻, 第5号, pp.457-467.
- 48) 久富善之編著 2008. 『教師の専門性とアイデンティティ: 教育改革時代の国際比較調査と国際シンポジウムから』勁草書房, p.85.

(指導教員 藤江康彦 教授)